

保育内容の指導法における模擬保育実践 － 能動的な共同による学びの視点から －

Development of a simulation teaching method in childcare education - A new perspective of active and collaborative learning -

杉村 智子* ・ 安東 綾子**
Tomoko Sugimura Ayako Ando

本研究は、保育内容の指導法における、模擬保育とその振り返りの授業実践を通じて、保育者、子ども役、観察・評定者の3つの視点から、学生がどのようなことを学ぶのか、また、学ぶ内容の質的な違いを検討することを目的とした。授業実践の結果、班で保育を行うことによる学びは、チームとして共同・協力することの意義や、予想外のことへの対処やそれに対処できるような事前準備の重要性への気づきであった。子ども役を行うことでは、子どもの発達状況を理解しておくことの重要性と自らがそれを理解していないことへの気づき、加えて、子どもの視点や立場からの保育者の言動や保育環境の解釈をすることが促された。また、保育を観察・評定をすることで、具体的な保育の方法や技術の獲得や、他班の良い点や改善点を自分達の学びに活かすという保育を改善する視点が促された。これらのことが、教職課程コアカリキュラムの保育内容の指導法における目標との関連性から考察された。

問題と目的

2017年に教職課程コアカリキュラム（文部科学省、2017）が策定され、大学の教職課程で修得させるべき内容や目標が明示された。幼稚園教諭養成課程における、保育内容の指導法に関する科目においては、全体目標として“主体的・対話的で深い学びが実現する過程を踏まえて具体的な指導場面を想定して保育を構想する方法を身に付ける”ことが掲げられた。また、この全体目標を実現する到達目標のうちの1つとして、“模擬保育とその振り返りを通して保育を改善する視点を身に付けている”という目標があり、“模擬保育とその振り返り”という、具体的な授業方法についても言及されることとなった。

本研究の目的は、保育内容の指導法の授業における、模擬保育とその振り返りについての方法論の構築という観点から、模擬保育を行うことによる学生の学びの内容を明らかにすることである。模擬保育を行うことで、上述したコアカリキュラムで掲げられた“主体的・対話的で深い学び”が、実現できるのか、また、“保育を改善する視点を身に付ける”ことが可能となるのか等、その学びの内容や効果を授業実践において具体的に検証しておく必要があるだろう。

大学や短大の保育者養成課程で行われている模擬保育の概要や形態については、おおよそ以下のようなものである。阿部（2016）によると、模擬保育は教育実習や保育内容、教職

* 帝塚山大学現代生活学部 こども学科 教授

** 九州女子短期大学 子ども健康学科 講師

実践演習等の授業の一環として行われ、保育時間としては、短いものでは 8 分、標準的な長さとして 15 分から 20 分、長いものでは 30 分となっている。また、グループで活動を行うのが一般的であり、グループの人数は、少ないものでは 4～5 名（例えば、上村、2010；高原・瀧・矢野、2016）、多いものでは 8～10 名程度（例えば、田爪・小泉、2006；笠原・吉川、2017）である。模擬保育を行う相手としては、学生が子ども役になる場合と、実際の幼児を相手とする場合があるが、多くの場合は、学生が保育者役と子ども役の両方を行っている。また、一連の活動において、模擬保育の前には指導案作成、保育後にはグループや個人での評定や振り返りが行われることが一般的である。

模擬保育の方法論やその効果についての従来の研究には、保育者となった学生の学びや省察に焦点をあてたもの（坂本、2015；坂本・田中、2015；田爪・小泉、2006；上村、2010）や、保育の観察者としての学びに焦点をあてたもの（池田、2013；畑・池上・上田・種子田、2017）がある。いずれの研究においても、模擬保育を通して学生の様々な学びや省察が促されることが明らかにされており、例えば、坂本（2015）は保育者となることによる気づきとして、臨機応変であることや事前準備の大切さ等をあげている。また、畑他（2017）は、観察者になることによって、保育の導入の工夫や準備物、時間配分等について具体的にイメージができるようになることを明らかにしている。

上述したように、模擬保育では学生が子ども役をやるのが一般的であるが、保育者役と子ども役、または保育の観察者といった、複数の視点からの学びが検討されている研究も行われている（高原・小川・瀧・矢野・下釜、2014；高原他、2016；笠原・吉川、2017）。これらの研究は、保育者としての視点に加えて、子ども役等の視点からも省察を行わせており、例えば、高原他（2014）は子ども役用の振り返りシートを用いて、保育内容の評定や、保育者役に対して感じたこと等の自由記述を行わせている。また、保育者役と観察者の両方の視点からの学びを検討している笠原・吉川（2017）は、学生の学びの様々なエピソード事例を明らかにしている。

しかし、これらの研究には、保育者、子ども役、観察者のそれぞれを行うことで学生が何を学ぶのかが明確に示されていないという問題点がある。例えば、高原他（2014）では、子ども役からみた保育者についての評価が中心に検討されており、子ども役を行うことによる学生の学びについては検討されていない。また、笠原・吉川（2017）では、保育者と観察者の両方の体験について省察させているが、保育者としての学びと観察者としての学びの具体的内容やその違いについては分析されていない。

従って本研究では、模擬保育とその振り返りの実践を通じて、保育者、子ども役、観察・評定者の 3 つの視点から、学生がどのようなことを学ぶのか、学ぶ内容に質的な違いを検討することを目的とする。保育者、子ども役、観察・評定者、という 3 つの視点からの模擬保育の一連の活動は、自らが保育を行う能動的な学びの場であるだけでなく、グループで共同して 1 つの保育をつくりあげ、また、他のグループの保育の観察・評価するという、共同の学びのプロセスを多く含んでいる。このような、能動的な共同によって実現される学びの具体的内容がどのようなものを明らかにすることは、模擬保育以外での学びの方法論の改善についても示唆を与えることができるであろう。

なお、本研究で行った模擬保育と振り返りの具体的方法において、従来の研究でも取り入れられている次の 3 点を留意した。まず 1 点目として、上村（2010）で行われているように、こども役の中に特徴のあるこども役を 2 名設定することである。このことによ

って、実際の保育現場のように予想ができないような状況が再現できると考えられる。2点目として、保育を観察する際に、複数の観点からの評定項目を備えた評定用紙を利用すること（池田、2013；高原他、2014；高原他、2016）である。観察者は、単に保育の感想をもとめられるのではなく、保育スキル等に関する観点から観察を行うことで、保育を見る視点が明確になるであろう。3点目は、保育後に、グループ討論（笠原・吉川、2017）や、グループ討論とその内容のプレゼンテーション（高原他、2016）を行うことである。このことにより、個人の気づきや学びをグループで共有することや、さらにグループの学びをクラス全体で共有することが可能となるであろう。

方法

(1) 調査対象者

4年生大学の保育士・幼稚園教員養成系の学部に所属する2年生で、保育内容（人間関係）の指導案作成と模擬保育に関する授業を受講した23名（男性3名、女性20名）を調査対象とした。23名を、模擬保育を行ってみたい年齢（3、4、5歳）を基準として、希望の年齢がおおよそ同じになるように4名もしくは5名から構成される5班に分けた。

(2) 授業全体の流れ

図1は、指導案作成と模擬保育の併せて10回（1回90分）の授業の流れと、授業内容の概要である。第4回までは指導案の作成、第5、6回目は模擬保育の準備、第7、8回は模擬保育の実施、第9回は模擬保育の振り返り、第10回は振り返りプレゼンテーションと振り返りレポートの作成に当てられた。以下に、模擬保育の方法と、学生の学びを明らかにするための分析対象となった振り返りレポートについて詳しく述べる。

(3) 模擬保育の方法

模擬保育を5回実施し、各班は、保育者や補助保育者として保育を行う保育担当、子どもの視点から保育者を観察して年齢段階に応じたふるまいを再現する子ども役担当、第三者の視点から保育者と子どもの関わりを観察して保育内容を評定する評定担当のすべての役割を担当した。表1は、各回における模擬保育の対象年齢と各班の役割を示したものである。各回で2つの班が子ども役担当となるので、模擬保育における子どもの数は、8～10名であった。また、同じく2つの班が評定担当となるので、評定者の人数も8～10名であった。

1回の模擬保育の流れについては、以下のものであった。まず、保育担当班が、実施する保育の対象年齢、ねらい、主な活動を簡単に説明してから模擬保育を始めた。保育時間は、15分以上で20分以内に設定された。保育終了後に、評定担当班が約5分間で評定と感想等の記入を行った後に、その感想等の発表を行う時間をさらに約5分間設けた。また、それぞれの班の役割の詳細を以下に示す。保育担当班は、1名が保育者となり主要な保育を担当し、1名が補助保育者となり保育の補助を行った。また、タイムキーパーを2名設定し、1名は指導案に時間経過を記録し、もう1名は指導案を参照しながら5分刻みの時間を保育士に知らせた。なお、4名の班の場合は、2つのタイムキーパーの役割を1名が行った。記録係1名はスマートフォンで保育の様子を撮影を行った。子ども役担当班は、設定された年齢の子どものふるまい（行動、言葉遣いなど）を再現し、それぞれの班の1名（計2名）は特徴のある子どもを考えて演じた。評定担当班は、保育や子どもの様子を観察し、保育者、補助保育者、子ども役、それぞれについて、図2に示され

事前レポート(授業前に各自が作成する)

- ・クラスイメージレポート:「自分は〇歳児のクラスを担当し今は〇月頃である」という想定のもとに、人間関係を中心とした子どもの姿をなるべく多く記述する(模擬保育をやってみたい年齢と時期を設定)
- ・教材収集レポート:クラスイメージレポートで設定した年齢の発達状況をふまえ、人間関係におけるねらいや内容に焦点があたるような教材(絵本、手遊び、簡単なルールのある遊び、簡単な作成物を伴う遊び等)を収集する



第1回:領域「人間関係」の理解

- ・これまでの保育内容の授業から学んだことについてのディスカッション
- ・幼稚園教育要領、保育所保育指針等における人間関係のねらいと内容の確認



第2回:指導案の基本的な考え方と作成方法

- ・指導案の枠組みと作成にあたっての留意点の確認
- ・クラスイメージレポートをもとに、同じ年齢を想定した者を基準に5つの班を構成
- ・各班で、各自の教材収集レポートをもとに遊びを実際にやってみたり、調べたことについての情報共有
- ・クラスイメージレポートや教材収集レポートを参考にして15分間の部分実習を想定した個人指導案を作成



第3回、第4回:個人指導案のチェックと班指導案の作成

- ・各自で、作成した個人指導案について指導案チェックリストをもとに修正
- ・各班で、修正した個人指導案を検討し、模擬保育を行うための班指導案を1つ作成



第5回、第6回:模擬保育の準備

- ・指導案に沿った準備物の作成と、子どもへの教示やことばかけの内容の検討
- ・班での役割分担の決定と評価の観点の確認
- ・教材の最終確認と模擬保育のリハーサル



第7回、第8回:模擬保育の実施

- ・15分間の模擬保育を各班1回ずつ5回実施
- 保育担当:班指導案をもとに保育を行う
- 子ども役担当:保育において年齢に応じた子ども役を行う
- 評定担当:保育を観察し、評定用紙(図2)をもとに評定を行いコメントを書く



第9回:模擬保育の振り返り

- ・各班で、他班の指導案をチェックしてコメントを作成
- ・各班で、評定担当班による模擬保育の評定とコメント、他班による指導案へのコメント、記録映像を見て、模擬保育での自班の良かった点・改善点等についての討論を行い、その内容について5分間のプレゼンテーションを準備



第10回:振り返りプレゼン・振り返りレポートの作成

- ・各班が、5分間の振り返りプレゼンテーションを実施
- ・各自で3つの観点からの振り返りレポート(保育者となり班で保育を行うことで学んだこと、子ども役を行うことで学んだこと、他班の保育や子ども役を観察・評定することで学んだこと)を作成

図1 授業全体の流れと内容の概要

表1 模擬保育の対象年齢と各班の役割

	対象年齢	保育担当	子役担当1	子役担当2	評定担当1	評定担当2
1回目	5歳	1班	2班	3班	4班	5班
2回目	5歳	2班	3班	4班	5班	1班
3回目	5歳	3班	4班	5班	1班	2班
4回目	3歳	4班	5班	1班	2班	3班
5回目	4歳	5班	1班	2班	3班	4班

模擬保育 評定用紙（評点担当 班） 学籍番号（ ）
氏 名（ ）

クラスの年齢：（ ）歳児） 活動の概要：

（保育者 班：評定）		がんば ろう	もうすこ し	できて いる	よくでき ている
1	保育者としての身だしなみが適切である	1	2	3	4
2	笑顔をはじめとした表情が豊かである	1	2	3	4
3	子どもとのやりとりを楽しんでいる	1	2	3	4
4	声の大きさ・発音・速さが適切で聞きやすい	1	2	3	4
5	子どもにわかりやすい言葉を使用している	1	2	3	4
6	子ども全体に目を配っている	1	2	3	4
7	時間配分が適切である	1	2	3	4
8	ねらいを達成できている	1	2	3	4

（保育者 班：よかったところ、感想）

--

（補助保育者 班：評定）		がんば ろう	もうすこ し	できて いる	よくでき ている
1	保育者としての身だしなみが適切である	1	2	3	4
2	笑顔をはじめとした表情が豊かである	1	2	3	4
3	子どもと視線の位置をあわせている	1	2	3	4
4	援助が必要な子どもに対応できている	1	2	3	4

（補助保育者 班：よかったところ、感想）

--

（子ども役 班：評定）		がんば ろう	もうすこ し	できて いる	よくでき ている
1	年齢相応の言葉のやりとりが再現できている	1	2	3	4
2	年齢相応の行動やスピードが再現できている	1	2	3	4
3	年齢相応の仲間関係が再現できている	1	2	3	4
4	特徴のある子どもの様子が再現できている	1	2	3	4

（子ども役 班：よかったところ、感想）

--

図2 評定用紙

た評定用紙の評定項目の観点からの評定とコメント記述を行った。また、評定担当班のうちの1名が司会進行役となり、その回の模擬保育の司会と進行を行った。

(4) 振り返りレポート

図1に示された第10回の授業において、各自が振り返りレポートを作成した。レポートは、保育者の視点、子ども役からの視点、観察・評定者からの視点、の3つの観点から、すなわち、①保育者として班で保育を行うことで学んだこと、②子ども役を行うことで学んだこと、③他班の保育や子ども役を観察・評定することで学んだこと、について、それぞれ200字程度での記述を行った。

結果と考察

振り返りレポートに記述された①保育者として班で保育を行ったことからの学び、②子ども役を行ったことからの学び、③観察者・評定者を行ったことからの学び、それぞれの23名分の記述を内容で区分した結果、それぞれ、63個、72個、73個の記述が抽出された。これらの記述は、2名の評定者（第1著者と第2著者）によって、内容が類似した項目が5事例以上あるものがカテゴリーとして分類された。まず、①については、“共同・協力することの意義”、“臨機応変な対応の重要性・難しさ”、“指導案通りに進まない・案の改善”、“保育者の話し方や声掛け・態度”、“実習や次の活動にいかす”、“自班の良かった点・改善点”、の6カテゴリーと、“その他”、に分類された。②については、“発達状況の理解の重要性と理解をしていないことへの気づき”、“子ども役を演じることの難しさ”、“子どもの視点での保育者理解と改善点の気づき”、“模擬保育の学びにおける子ども役の重要性”、“子どもの視点での子ども理解”、“子ども役になりきる事ができた”、の6カテゴリーと、“その他”、に分類された。また、

③については、“保育者の話し方や声掛け・態度”、“他班の良い点や改善点を自分達の学びに活かす”、“第三者の視点からの気づきや発見”、“安全面の配慮とトラブルへの臨機応変な対応の仕方”、“実習や次回の活動にいかす”、“保育を楽しむことの大切さ”、の6カテゴリと、その他、に分類された。表2には、それぞれのカテゴリに分類された項目数（括弧内）と、項目例を示している。

表2から、保育者として、子どもとして、評定・観察者として、それぞれ異なった学びのカテゴリが抽出されたことがわかる。共通して抽出されたカテゴリは、保育者としての学びと、評定・観察者としての学びにおける、“保育者の話し方や声掛け・態度”と、“実習や次回の活動にいかす”の2カテゴリのみであった。このことは、模擬保育において3つの役割を担い、3つの観点や視点から省察を行うことで、異なった種類の学びが促進されることを示している。

まず、保育者として班で保育を行うことによる学びで一番多く見られたものは、“共同・協力することの意義”であった。高原他（2016）においても指摘されているように、班で協力することで様々な視点からの意見がでること、分からない点をメンバー同士で補えること等の、チームで行うことの意義への気づきが多くみられた。このことは、主体的・対話的で深い学びプロセスを反映しているといえるであろう。また、本研究で明らかになった重要な点は、実際の現場における共同の重要性にも目がむくようになったことである。保育者同士の関わりの雰囲気、保育者同士のコミュニケーションや、打ち合わせ・事前準備の大切さへの気づきにみられるように、現場でチームとして保育を行うという意識が促されることが、班で1つの保育を行うことからの最も重要な学びであるといえるだろう。

班で保育を行うことによる学びで、次に多くみられたものは、“臨機応変な対応の重要性・難しさ”と、“指導案通りに進まない・案の改善”であった。坂本（2015）は、教育実習中に保育者となって設定保育を行った学生の省察を分析しているが、本研究と同様に、保育における臨機応変さや、指導案通り、時間通りにならないこと、事前の計画の重要性に関するものをとりあげている。このように、実際に保育を行うことによって、様々な予想外のことが起きることやそのことへの対処、また、それに対処できるだけの事前準備の重要性への気づきが促されるといえるであろう。

次に、子ども役を行ったことからの学びで、一番多く見られたものは、“発達状況の理解の重要性と理解をしていないことへの気づき”や“子ども役を演じることの難しさ”であった。これは、子ども役として演じる年齢の子どものことばや振る舞いを再現するにあたって、その年齢の発達状況がどうであったかを考えたときに、自らがそれを把握していなことや、それを把握しておくことの重要性や難しさに気付いたというものである。また、異なった年齢の子ども役を演じることで、詳細な発達の姿を理解しておくことの重要性への気づきも促された。このような気づきは、保育者や観察者の視点からの学びの中にはまったくみられなかったものであり、子ども役の視点になってはじめて促される重要な側面であるといえるであろう。

子ども役を行ったことからの学びで、次いで多く見られたものは、“子どもの視点での保育者理解と改善点の気づき”や“模擬保育における子ども役の重要性”であった。笠原・吉川（2017）は、保育者に声をかけてもらうのは嬉しかったという子ども役の体験事例を報告しているが、本研究においても、保育者の自分に向けた行動や援助、言葉

表2-1 班で保育を行ったことからの学び

共同・協力することの意義(13)

- ・今回の模擬保育をするにあたって、班で協力することがとても大事だと思いました。子どもの姿を考える時、指導案を作成する時、模擬保育のリハーサルをする時、模擬保育を実践する時などの全ての時において班で協力することで様々な視点から意見が出て、リハーサルで現実味が増し、模擬保育をスムーズに進めることができた。このことを経験できたのが今回の模擬保育での一番の収穫だったと思う。
- ・指導案から班で書くことで、保育者同士の関わりも現場とは少しちがうと思うけど雰囲気味わえたと思います。
- ・緊張したり、想像していたこととは違うことが起こったりして、予定していたことが頭から抜けたりするので、保育者同士がもっと打ち合わせやコミュニケーションをとって、スムーズに活動が展開することが大切だと思いました。
- ・班で共同して保育を行うことで、一人だけでは思いつかなかった点や、どうしたらいいかわからない点をメンバー同士で補えるので、よりよい保育になったのではないかと思います。
- ・今後、実習などで一人で保育を行う際も自分一人で考えるのではなく、本番に向け友達や先輩の先生に相談するなどして、事前準備をしっかりとしていきたいと思う。また、シミュレーションは絶対していきたいと思う。
- ・練習を行った時に、班の全員が意見を出し合ったのもよかった。一人だけの考えでは気付けない部分にも気付くことができ、様々な方向から模擬保育について考えられたと思う。

臨機応変な対応の重要性・難しさ(11)

- ・子どもは活動中にこけてしまったり、友達とけんかをしたり、予想外のことをすることがあるので、臨機応変に対応することが難しく、そういったことも考えて保育を行わなければならないと学んだ。
- ・今回、保育者の役を実際に模擬保育を行い、指導案通りにはいかないことや予想される子どもの姿を考えていても、自分達が思っていなかったような行動や発言が多く見られ、様々な状況にすばやく臨機応変に対応することが必要だと思いました。
- ・私は今回記録係で、外から指導案と比べながら見てきて、指導案にはない子どもの姿などにも対応できていて、指導案からずれても、臨機応変に行動したり声をかけたりすることの大切さや難しさ(私だったら何て言うかなど考えて)を感じました。
- ・実際に全体でする前に5人でリハーサルを何回も試みて、時間がうまくいくか、説明をわかりやすくできるかなどを確認してからやりましたが、子役が入ってみると思ってもなかったトラブルがおこったり、自分だけでは対応しきれなかったりと考えないといけないことがたくさんあって大変でした。
- ・補助保育者として、何をすべきなのか、主保育者の人の様子も見ながら臨機応変に対応するのは難しいですが、楽しさも感じられました。

指導案通りに進まない・案の改善(11)

- ・指導案を作成したものを基に、私が保育者になって模擬保育を行うことで、指導案通りに全ていくわけではないことに気づいた。活動内容が盛りだくさんで実際の時間を超えてしまったので、歌か手遊びをどれか一つにしぼって折り紙の製作活動に移した方がいいという点が反省すべきことだと思った。
- ・保育者と補助保育者の行った保育について、班で共同して学んだことは、指導案で書いたようにはいかなかったということです。指導案で考えていた時間配分の通りには保育が進まず、思いの外時間がかかってしまい時間をオーバーしてしまったり、指導案の中で考えていた声かけやよりよくするために考えていたことが実際試してみると忘れてしまっていて出来ていなかったり、実際にきちんと保育をしてみないと分からないような改善点がたくさん見つかりました。
- ・指導案の内容が不十分だったり、具体的ではなかった点もあったため、よく構成を考えてから保育に取り組まなければならないと反省点もあった。
- ・模擬保育をするにあたって一番大切なことは子どもの姿を想像しながら作成することだと思います。この活動をしたら子どもはどんな行動をとるのかなど具体的に思い浮かべながら指導案を作成することが大事だと感じました。
- ・流れとして指導案を基に活動を行うなかで、指導案通り上手いかなかったり子どもの様子が予想と違っていたりなど、予想外のことも多くきちんと指導案の時点で具体的に活動予想をしておくことが改めて大切だと分かりました。

保育者の話し方や声掛け・態度(7)

- ・笑顔ですることや子ども達に分かりやすい説明、はっきりと聞こえやすい声、一緒に楽しみながらすること、周囲の環境に気をつけて安全に行うことがとても大切だということが改めて分かりました。
- ・皆に共通して言えることで、笑顔で子どもに接していたので、笑顔は大事なことであったため気づくことができた。
- ・子どもと関わる時に立ったまま話していると、威圧感を感じる可能性があるためその面に配慮することができた。
- ・大人からの視点ではなく子どもが転んでしまった時は、早く立ちなさいと厳しい声をかけるのではなく、痛かったね、泣かなくてえらいねなど子どもの気持ちに寄り添った言葉掛けをしていくことが大切だと感じました。

実習や次の活動にいかす(6)

- ・模擬保育の最中のトラブルが発生した時でさえ、焦ってうまく対応できなかったと自分で反省点ができたので、実際の部分保育の時はもっと焦ってしまうだろうということが学べたので実習の際に生かしていきたい。
- ・今回学んだことを生かして将来すばらしい保育者になりたい。
- ・実際に実習にいったら、これを一人で考えて一人で行わなければならないため、今回の活動は私にとってすごく有意義なものになった。

自班の良かった点・改善点(6)

- ・全員が楽しむことができていたのでとてもよかったです。
- ・保育者の人はずっと笑顔で最後までやりとげたり、色々な行動をする子どもへの対応もしっかりしていて保育士として必要なことができていたと思いました。
- ・私の班ではルール説明の仕方や安全面の配慮での指摘を受けたので次はそれも考えながら同じことをいわれないようにしていきます。

その他(9)

- ・他の班からの意見で、子ども一人ひとりに対応していたとか、目線をあわせて話しができていたとか、様々な良い点をたくさん言ってもらえたので、模擬保育を終えてできなかったと沈んでいた気持ちがすこし落ち着き自信を持つことができた。
- ・今回自分のグループでは4人構成で模擬保育を行ったが、強く思った事は人手がもっとほしいということである。特に保育者の役割が必要だと感じた。知り合い同士のノリもあったが、それを抜きにしても学生複数にかなり手間取る場面があり、これが本番の子ども相手だったら考えると、とても手が回りそうにないと感じた。現場での人手不足で苦労しているということが、模擬保育を通じて学べた。
- ・たった一つの遊びをするにも、たくさんの工夫やたくさんの配慮があって、ただその活動をさせればいいというものではないと身に染みてわかった。

表2-2 子ども役を行ったことからの学び

発達状況の理解の重要性和理解をしていないことへの気づき(14)

- ・子ども役をする上で、子どもの年齢としてどのような行動がみられるか、どのような発言があるかなど、改めて子どもの発達についての理解がまだまだ出ていないなと思いました。
- ・子ども役をするにあたって、その年齢に合った子どもの発達をあまり正確に分かっていなかったのでものによって子どもを演じればいいのか分らず、子どもの姿をきちんと再現するのが難しかったです。
- ・子ども役をするということは、子どもの発達への理解を深めることができるものだなと思った。1つ歳が違っただけで、子どもの姿が大きく変わってくるので、年齢差の発達の違いなどをよく考え、学ぶのにとっても良いものだなと思った。
- ・子ども役を行うことで、子どもの姿をしっかり理解していないと子ども役にはなりきれないと学んだ。子どもの姿を知るには、子どもをよく観察しなければならない。そして、子どもの発達について理解し、子どもの姿を的確に観察できることで、ひとり一人の子どもに応じた支援が出来るようになるだろうと考えることができた。
- ・年齢に応じた行動や発言をするには、まず、その発達段階や子どもの姿を頭にいれておかなければならないし、指導案や実際に保育をするときにも子どもの姿を知っておくことは重要なことだと思うので、実習までに大まかな姿や発達段階はしっかりと頭の中に入れておいて、子どもの行動や発言に臨機応変に対応できるようにしたいなと思います。
- ・子ども役を行うことで、年齢にあった接し方やしゃべり方ができていたのかという不安がありました。5歳ではこれだけしゃべるが、3歳ではどの程度のしゃべり方なのかあまりわからなかったため、まだまだ勉強不足だなと感じることができました。

子ども役を演じることの難しさ(13)

- ・子ども役を演じるというのは実際行ってみると簡単ではないということが分かった。
- ・実際の子どものように行動したり、発言するのか子どもとの触れ合い経験が浅く分からない部分が多かった。
- ・実際の子どものちゃんと見たことがないということもあり、本当の子どもとの比較も自分の中であまりできませんでした。
- ・最初だということもあり、恥じらいが強く、皆に見られている緊張もあって実際の子どもの役になりきれなかったもので、模擬保育をする上で保育者の姿勢だけではなく、子どもを演じることで実際にこんなことをするだろうと想像してなりきることも大切だと学んだ。
- ・子どもってどんな行動を取るんだろうって想像しながらするのがすごく難しく、自分が小さかった頃はどんなだったっけと思い出しながら子ども役をしていました。
- ・子ども役を行っている時、(〇歳ってどんなことすんの?)(どうやってなりきんの?)というような事をずっと考えていて、保育者よりも子ども役の方が断然難しいなと思いました。

子どもの視点での保育者理解と改善点の気づき(10)

- ・子ども役をしてみても、自分がもし失敗してしまったりみんなと同じように上手に活動できなかった時にどのような声掛けを先生からしてもらったら嬉しいのかっていうのがわかりました。
- ・先生役の方は、ほおっておくのではなく自分と同じ立場になって援助や言葉かけをしてくれたのがすごく嬉しくて子どももこうやって支援してもらったら嬉しいやろなって身をもって感じる事ができたのがよかったです。
- ・目を見て話してくれたり、ちょっとした反応・動きにも保育士さんが気付いてくれると、嬉しいことが身をもってわかった。
- ・子役だと保育者の良いところ、直すべきところが一番近くて感じられて良かったです。
- ・子ども役に立ってみて、分かることがたくさんあるということがわかりました。ああ、こんなしゃべり方をされるとわかりづらいだろうなということや、ここあぶないなどたくさん発見もあり、学ぶことがたくさんありました。

模擬保育の学びにおける子ども役の重要性(9)

- ・自分が子どもになりきる事で子どもの行動を理解することができるし、保育者の子どもへの対応を直接観察することができる。なので子ども役をまじめにすればするほど様々なことを学ぶことができた。
- ・初めて子役らしい子役をやってみて、子役というのは保育する班が何を学べるか、何を体験できるかが自分達にかかっているのでもともと重要だと感じました。
- ・先生と話している中でうまく伝えられなくて困ったり、泣いたりしてしまう子どももいるかもしれない。その子どもを表現することで保育者役は、聞き出し方を学んだり、対応方法を学んだりすると思う。
- ・特徴のある子どもを演じる際に少しの恥じらいが出てしまったために、完全に演じることができず、だだをこねていたのですが、恥ずかしくなり、すぐ保育者さんの言う通りになってしまうので、保育者さんの特徴的な子どもに対する対応の仕方のレパートリーを減らせてしまったなと反省しています。

子どもの視点での子ども理解(8)

- ・子どもだったらどう行動するのかを考えながらすることができたと思いました。
- ・子役をやりながら、こうした方が良いのかなとか、子どもならこうするのかと考えながら行うことができたので、自分の力になったし、友達がどのようにしているか見ながら自分も動けたので良かったと思う。
- ・自分で子ども役を普段はすることがないので、私が保育園に通っていた時のように行おうとして、気づいたことがあり、子どもはとてもわがままで、自己中心で動いていることがわかった。グループで活動はするけれども自分の世界で動いているので、グループ活動などする時は、このようなことについて考えて指導しなければならないと思った。
- ・実際にあんなにも恥を捨てて、子ども役に徹したのは初めてで、なんとなくこんな子どももいるだろうなと自分で感じていた。

子ども役になりきる事ができた(6)

- ・子ども目線になるのはすごく難しく、恥ずかしいかなと思ってたけど、案外そうでもなくて年齢に応じた子役を演じることができた。
- ・特徴ある子役を演じたときに、ジャンケンで後出しをするというのをやってみて、本当に子どもがやりそうだなと思って自分でできたのはよかったと思う。
- ・子役が一番やっていて楽しかったし、子役になりきれて楽しむことができた。

その他(12)

- ・私たちは大人なので、すぐに理解できてしまうという場面も多かったのではないかなと思った。
- ・実際に楽しみながら笑顔でできたのでその点については良かったと思う。
- ・子ども同士の関わりや保育者との関わりなど実際に見てみないと分からないことはたくさんあるなと思いました。なので、実習に行った際にはこのような点にも目をむけながら保育に関われたらいいなと思いました。
- ・自分の知識と想像で子ども役をすることは難しくなりきれていない所もあったと思うが、子どもの目線で実際に模擬保育を受けることで、間近に友達の保育をみれたのでとても勉強になった。

表2-3 観察者・評定者を行ったことからの学び

保育者の話し方や声掛け・態度(21)

- ・他の班を見ていて一番気になったのが、保育者の話し方やしぐさでした。良いところも、悪いところもありましたが、保育者の話し方や雰囲気作りが子どもの活動に大きな影響を与えるんだと思いました。
- ・子どもの目線にあわせて話したり、身振り手振りをつけてみたり、話し方に抑揚を付けている人を見ていると真似したいなあと感じました。
- ・他の班をみているとやっぱり笑顔で対応する、はきはきと喋るなどが大事だなと思いました。保育者が暗いと子どもも暗くなってしまう声が小さいとスムーズに進行できなくなってしまうので、普段から話すときは細かい所まで意識して話せたらいいと感じました。
- ・子どもに対してどんな声かけをすればいいかや、安全に配慮する上での声かけやそれを導入の形で入れてみる(広がる時に手を広げて回ってあたらないか自分で確認するなど)ことなど具体的な声かけや行動ですごく参考になる部分がありました。
- ・他の班の人の先生などの子どもへの関わり方を見てすごく子どもへの言葉掛けが上手だなと思いました。子どもが発言した事に対して否定的ではなくて、そうだね、それもいいね、などの子どもの発言を認めてあげてそこから言葉のやり取りが続いてコミュニケーションが取れる保育者さんがいてすごくよかったです。
- ・こんな言葉掛けもいいなと思うことがたくさんあり、言葉のレパートリーが増えてこれからたくさんさんの模擬保育をするにあたってとてもいい経験になりました。
- ・子どもへの言葉のかけ方一つを見ても、それぞれの保育者で違い、保育者の人間性が出ていると感じられた。そのような事からも、保育者は普段のふるまい(言葉や行動、態度など)から意識して気をつける必要があると感じ、学べた。
- ・他の班の模擬保育を見ていて、すごく話し方が上手い班もあれば、自分と同じように喋りが学生向けになっている所もあった。
- ・説明をするのに子どもの視線に合わせてしゃがんだりしているのはものすごく良い所だと思った。

他班の良い点や改善点を自分達の学びに活かす(15)

- ・他の班のやる内容も様々でとても勉強になりました。こんな風に他の人の活動を見ていいところは真似して気になったところは指摘しあい、お互いに成長できるようにしていきたいです。
- ・回数を重ねる毎に保育班も子役も緊張や恥じらいがなくなって、より良い保育ができていたと思う。他の班の、良いところ、悪いところをちゃんと見ることができていた証拠だなと感じた。
- ・他の班を評定することで、改善点などを考えるので、そこでた改善点が自分達の保育の中にもないかなど考えることができたので次の保育がよりよりのみのできるのではないかと思います。
- ・どの班の保育もそれぞれ素敵なものだったので、良い所は自分も吸収して今後に活かしていき、改善すべきだなとおもったことは、自分の保育でも気をつけていかないと考えた。
- ・他の班で良い行動や言葉づかいをしているのを見て、こういう行動をとればより良くなるなというのを自分の中で改善できたように感じました。
- ・他の班の保育を客観的に見ることで、自分が保育を行う時に取り入れたい点や、注意しなければいけない点などが見えてきた。
- ・自分の班には足りなかった所、また観察した班に必要なと思った所など、評定することで様々な観点で学ぶことができた。それは、模擬保育しかり指導案の書き方なども、グループだけでなく個人の見直しもすることができ、とても良い機会になった。

第三者の視点からの気づきや発見(9)

- ・自分が保育者をしていると、進めることが精いっぱいになってしまい、子どもの細かい反応や行動を見逃してしまったりしたので、他の班の模擬保育を見ることで、子どもへの対応についてしっかりと考えることができたと感じた。
- ・実践する事だけが大切なのではなく、第三者の視点から保育を観察することも大切なのだと気づくことが出来た。
- ・評価をする第三者の目で気づくこともあるので、気づいたことを自分の保育に改善して取り込もうと思った。
- ・自分達が保育を行っている時には気づけない事にも目がいき、冷静に判断することができた。
- ・第三者から見ると、保育では、はやりみえていなかったものを第三者では、良い所も悪い所も見えてしまうので、全体的に見て、きちんと間違っている所はないかを確認することが大切だと思いました。

安全面の配慮とトラブルへの臨機応変な対応の仕方(9)

- ・子どもがもめたりトラブルを起こした時に、どう対処したらよいかを考えることができた。
- ・保育を行う際には子どもの目線になって考えることが第一であるが、安全面の配慮、怪我をした子の配慮など、何があっても対応できることが必要だと思った。
- ・安全が一番大切であるが、安全面が欠けている班などがあり、危なすぎると思うところなどがあって、自分が次するときは気をつけていかなければならない点だと思いました。
- ・裸足で活動を行うことを転倒などをしたことで怪我が起こらないようにするという配慮の仕方は発想していなかった部分なのでとても勉強になった。

実習や次回の活動にいかす(6)

- ・この授業での活動を通じての気づき、発見がたくさんあったので、ここでの学びを実習に生かせるようがんばりたいです。
- ・自分の班が子役をした時とはまた違う感じの子役の姿をみることができ、次の模擬保育につなげようと思った。
- ・子ども役の観察をしている時は、こういう子どもが実際にいそうだな、という行動や発言をしている人がいたのでこれからは特徴のある子どもの参考として指導案を作る段階で考慮したいです。

保育を楽しむことの大切さ(5)

- ・一番は保育者も楽しむことが大切であるということを知ったので、これからも楽しく保育を行っていきなさいと思いました。
- ・保育を行う上で、笑顔で保育者自身も楽しむことは、本当に重要なことだと思いました。保育者の顔がこわばって笑っていなかったら、子どもたちも笑えないし、保育者が楽しいという気持ちを表に出していないと子どもたちも思い切ったのしむことができないなと思いました。
- ・他の班の保育を見て、一番思ったのが、子役も保育班も含めてみんな笑顔で純粋に楽しんでいると感じた。それはとても大切なことだと思う。

その他(8)

- ・実際の子どもの動きではないけれど、いろいろな子どもがいるので、その子どもに合わせた対策を考えることができたので良い時間になったと思う。
- ・評定をすることでより保育や子ども役を観察することに集中することが出来ると思った。
- ・他の班の模擬保育で、時間配分がうまくできておらず、最後バタバタしたりしていたので、きちんと流れを把握しておく大切さが分かった。
- ・保育者と補助保育者との協力合っている所を見て、事前準備や打ち合わせをすることは大切なことだと学んだ。

かけについて、身をもって嬉しさを感じたという報告が多くなされた。それに加えて、子どもの視点からの保育者の言動や保育環境の改善点への気づきも促された。このように、子どもの視点や立場から保育者の言動や保育環境を解釈することは、それらの重要性を再認識することに繋がるであろう。また、子ども役が忠実に再現されることで、保育する側の学びがより充実したものとなることへの気づきは、模擬保育全体の学びの質に関わる重要な観点であると考えられる。

最後に、観察者・評定者を行ったことからの学びで、一番多くみられたものは、“保育者の話し方や声掛け・態度”に関するものであった。この点は、保育を行うことからの学びにおいても言及されていたがその数は多くはなく、観察・評定者を行うことによる特徴的な学びであるといえるであろう。池田（2013）は、同級生の模擬保育を観察・評価したときに、子どもへの声掛けや言いまわし等を参考にしたいと思う場面が多くあったという省察を例示している。また、上村（2010）は、ビデオ映像で保育を振り返った際の観点として、保育技術の獲得をあげている。このように、外側から保育を観察・評定することで、より具体的な保育の方法や技術の獲得が促されるといえるであろう。つまり、この評定・観察者としての学びが、具体的な指導場面を想定した保育を構想する技術に繋がることが示唆される。

また、“他班の良い点や改善点を自分達の学びに活かす”という、保育を直接行うことを通じてはあまり言及されなかった、保育を改善する視点からの気づきも多くみられた。このことから、保育も子ども役もしていない第三者からの視点で、ゆとりをもって他者の保育を詳細に観察することで、良い点や改善点、さらに、自分達の保育に取り入れるべき点についても意識が及ぶようになったといえるであろう。“第三者の視点からの気づきや発見”の学びの例にあるように、保育をしていると進めることに精一杯になり子どもの細かい反応や行動を見逃してしまう。第三者からの視点になって初めて多くの側面に気づくことが出来るという点で、観察者・評定者としての学びは不可欠なものであるといえるだろう。

以上のように本研究では、模擬保育とその振り返りの一連の活動における、班で保育を行うこと、子ども役を行うこと、観察・評定者行うことで、それぞれ質的に異なった気づきや学びが促されることが明らかになった。目的部分で述べたコアカリキュラムで掲げられた学びと照らし合わせると、まず、班で保育を行い他のメンバーと主体的に共同・協力しながらチームで目的を達成していくことは、主体的・対話的で深い学びプロセスを反映していることが予想される。次に、保育を観察・評定をすることで、具体的な保育の方法や技術の獲得、つまり、具体的な指導場面を想定した保育を構想する技術に繋がることが示唆される。また、観察・評定は同時に、他班の良い点や改善点を自分達の学びに活かすという、保育を改善する視点を促す可能性が示された。さらに、子ども役を行うことで、子どもの発達状況を理解しておくことの重要性と自らがそれを理解していないことへの気づき、加えて、子どもの視点や立場からの保育者の言動や保育環境の解釈が促された。これらは保育者や観察者の視点からの学びの中にはほとんどみられず、子ども役の視点になってはじめて促される重要な側面であることが明らかになった。

今後の課題としては、本研究で明らかになった 3 つの視点からの学びや気づきの内容について精査し、模擬保育やその振り返りを通じた全体の学習効果についての評価尺度

等を作成することが考えられる。模擬保育とその振り返りにおける、能動的な共同による学びの側面について、さらに具体的に明らかにし、さらなる方法論の開発とその効果の検証が必要であろう。

引用文献

- 阿部アサミ：保育者養成校における実習に関する研究－模擬保育の意義に着目して－、白鷗大学教育学部論集、10、pp.263-276、2016
- 畑 啓子・池上貴美子・上田智佳・種子田順子：初心者学生の模擬保育見学による意識変容に関する縦断的調査、甲子園短期大学紀要、35、pp.47-52、2017
- 池田充裕：模擬保育による学生の教授力・評価力の向上に関する取り組みと課題－ビデオ撮影による自己評価とピア評価・教員評価の効果の検証－、山梨県立大学人間福祉学部紀要、8、pp.61-72、2013
- 笠原正洋・吉川寿美：保育内容「人間関係」の模擬保育実践において活動の枠組みモデルか実演者・参観者の学びに及ぼす効果、中村学園大学発達支援センター研究紀要、7、pp.89-95、2017
- 文部科学省：教職課程コアカリキュラム
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/126/houkoku/1398442.htm)、2017
- 坂本真由美：模擬保育を通じた自己省察の試み、中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要、47、pp.111-116、2015
- 坂本真由美・田中るみこ：自己省察が学生の保育実践の意識向上に与える影響に関する一考察－模擬保育における他者評価と映像の自己省察から－、中村学園大学発達支援センター研究紀要、7、pp.19-24、2015
- 高原和子・小川鮎子・瀧信子・矢野咲子・下釜綾子：幼児の身体表現指導における指導実践後のふりかえりの有効性、福岡女学院大学紀要人間関係学部編、15、pp.89-95、2014
- 高原和子・瀧信子・矢野咲子：保育内容（表現）身体表現指導における模擬保育後のふりかえりに関する一考察、福岡女学院大学紀要人間関係学部編、17、pp.23-28、2016
- 田爪宏二・小泉裕子：保育士志望学生の「保育者アイデンティティ」確立に関する検討－模擬保育の実践を通して－、鎌倉女子大学紀要、13、pp.27-38、2006
- 上村晶：実習事前指導における模擬保育ビデオを活用したカンファレンスの実際と効果、高田短期大学紀要、28、pp.89-100、2010